

## 平成29年度香川大学大学院修了式 学長告辞

本日、香川大学大学院から学位を授与された239名の修了生の皆さん、誠におめでとうございます。本学大学院は皆さんを含め、これで5,103名の修了生を輩出したこととなります。皆さんを支えて来られたご家族や関係者の皆様に心からお慶びを申し上げます。本日、ここに平成29年度香川大学大学院の修了式を挙行できることは、皆さんの指導教員はもとより、香川大学教職員一同にとりまして大きな喜びであります。

今日のこのおめでたい日を皆さんと迎えるにあたり、私自身が大学院を修了した平成元年頃を今、思い出しております。私の過ごした研究室は、自分と同じ学部の卒業生以外に他学部や他大学からの学生も混じり、企業からの研究者も一部参加しておりました。当初は研究のイロハも知らず、自分の居場所があるのだろうかと不安に思ったことが懐かしく思い出されます。研究室を率いておられた当時の恩師の教授は常々、「研究は100回やって1回成果が出たら御の字だ。」と、言っておられました。それでは学位を取得できるのは100人の大学院生でたった1人の確率ではないかと、私は内心恐れおののいたものでした。さすがに実際には学位に関してはそこまでは悲惨なことはありませんでしたが、確かに世の中の人々の度肝を抜くようなイノベーションは、100回に1回くらいかもしれませぬ。

一方で、学問の進歩は一人一人の研究者の血の滲むような努力の蓄積の上に達成されることも事実です。皆さんが本学の大学院で遂行された研究は、人類の福祉や幸福の実現の観点からみて、その大小はともあれ確かな足跡を残されたと確信しております。

さて、私自身は大学院を修了以来 30 年近く医学研究の分野にいましたが、医学に限らずすべての研究分野に共通して最も重要なポイントがあると思っております。それは、リサーチクエスチョンが明確であるかどうかです。そのためには今自分の興味のある分野、身を置いている分野で本当に困っていること、解決すべきことは何かを常に明確に認識している必要があります。ここが不明確でぐらついていては、研究は成功しませんし、そもそも研究の意義すらないと思います。

皆さんは、香川大学大学院で研究生活を送られ、本日見事に学位を取得されました。いよいよこれからは、皆さんが学んだ知識や経験された研究のスキルを応用して社会に貢献していただくこととなります。これから関わられる分野、領域において本当に困っていること、解決すべきことを見極めて、その課題解決に向け皆さんの力を存分に発揮してほしいと思います。

今、日本を含む世界の国々は、あらゆる意味で大きな曲がり角にきております。AI やロボットの導入、少子高齢化などに伴う社会構造の劇的な変化、隣国との摩擦の増大、宗教や民族間紛争の拡大、地球環境の

悪化など、難題が山積しております。皆さんがこの状況の中でどのような役割を果たし、どのような解決策を提案していくべきかがまさに問われているのではないのでしょうか。このような時代では、国のこと、人類のことを心の底から考え解決策を提案していく人間が今まで以上に求められています。当然ながら、本学大学院を修了された皆さんの双肩にも大きな期待がかかっています。皆さん一人一人の使命は何かを今一度じっくり考え、それを強く意識されて、大いに社会に貢献していただくようお願いしております。

研究は大学院時代の一回のみではありません。人生百年時代を迎え、何度も学び直しが必要になっております。香川大学大学院はいつでも皆さんに扉を開いて待っております。人生は壮大な研究だと思っていつでも飛び込んできてください。

あらためまして、本日無事修了式を迎えられた皆さん、誠におめでとうございました。

平成30年3月24日

香川大学長 笥 善行